

後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション+研究発表

1. 解釈学的神学と現代思想
2. 政治神学1——シュミットとモルトマン
3. 解放の神学1——フェミニスト神学1
4. 解放の神学2——フェミニスト神学2
5. 政治神学2——アガンベン
6. 政治神学3——ジジェク
7. 研究発表
8. 研究発表
9. 研究発表
10. 解放の神学3——黒人神学 12/12
11. 解放の神学4——アジア 12/19 12/26は休講（東京出張）
12. 宗教の神学とヒック 1/9
13. エコロジーの神学 1/16：レポート提出（締めきり）

<前回>アガンベン2→ジジェク

(3) アガンベンから政治神学へ

16. 「オイコノミア」（経綸）と政治神学：統治の二重構造、近代の統治機構を源泉に遡って理解すること（「ミッシェル・フーコーによっておこなわれた統治性の系譜に関する研究の延長線上に位置している」→系譜学、ギリシア哲学から教父思想へ）。

・「三位的オイコノミアという装置が、統治機械の機能と分節化——内的分節化と外的分節化——を観察するにあたっていかに特権的な実験室たりうるかを示す」（9）

「統治機械の二重構造」「権威(auctoritas)と権力(potestas)」「オイコノミアと栄光」「権力はなぜ栄光を必要とするのか？」

17. 政治神学 対 オイコノミア神学（ポリスとオイコス）：オイコノミアと生の秩序

「テーゼの一つ」：「広い意味での政治的パラダイムが二つ、キリスト教神学に由来している」

「互いに相反するが、機能上は互いに結びついている」、「一つは政治神学である。これは、単一の神において主権的権力の超越性を基礎づける。もう一つはオイコノミア神学である。これは、主権的権力の超越性の代わりにオイコノミアは神の生の秩序であれ、人間の生の秩序であれ、内在的秩序——狭義の政治的秩序ではなく家の秩序——として構想される。政治神学のほうからは政治哲学と近代の主権理論とが生じてくる。オイコノミア神学からは近代の生政治が生じてくる。その生政治は、今日における社会生活のあらゆる面において、オイコノミア[経済]と統治の勝利を見るにまで至っている。」(13)

・「政治神学的パラダイム」「カール・シュミット」「近代国家理論の重要な概念はすべて、神学的概念が世俗化されたものである」、「オイコノミア[経済]は世俗化された神学的パラダイムであるかもしれないとするテーゼは、当の神学自体へさかのぼって作用する」(16)、「神の生と人間の歴史とがはじめから神学によって一つのパラダイムとして構想されていること、つまり神学はそれ自体からして「オイコノミア的」だということ、神学は単に世俗化を通じて後から「オイコノミア的」になるということではないということ」(16-17)、「歴史とは結局、政治的問題ではなく「経営」や「統治」の問題だということ」、「キリスト教信者が求める永遠の生はつまるところ「国(polis)」というパラダイムのものではなく「家(oikos)」というパラダイムのもとにある」(17)

18. 近代化・世俗化をめぐって：オイコノミアと統治→社会：経済と政治

「ヴェーバーにとって世俗化とは、近代世界のいや増す幻滅と脱神学化の過程の示す一面である。それに対してシュミットにおいては反対に、世俗化は神学が現前しつつづけているということ、神学が近代においてまさしく働きつつづけていることを示すものであ

る」、「神学的諸概念と政治的諸概念」「ある特有の戦略的關係」、「その關係は政治的諸概念をその神学的起源へと差し向けつつしるしづけるものである」(18)

「世俗化の問題をめぐる論争」、「ハンス・ブルーメンベルク、カール・レーヴィット」(20)

20. アリストテレスと単一支配(モノルキア) → 政治神学のギリシア哲学的文脈

「アリストテレスの『形而上学』第十二巻」「主権者が多くいるのは良くない。主権者は一人であるべきである」、「単一支配(monarchia)」、「ユダヤ教およびキリスト教という領域において、単一支配的権力に対する政治神学的な正当化がなされたが、このアリストテレスによる不動の動者という神学的パラダイムはいわばその正当化の原型になっているというのである」(28-29)、「偽アリストテレスの『宇宙論』」「古典的政治学から神の単一支配というユダヤの構想への架橋となっている」、「神はあらゆる運動の超越的原理であり、その原理はちょうど軍司令官が自分の軍隊を導くのと同一ように世界を導くものとされる」、「神とは「権力」が」「宇宙において働くにあたっての前提条件のことである」(29)

21. 単一支配と三位一体、政治と宗教との本質的連関

「ペーターズンは」「アレイオス派に関する論争に関して、神の単一支配という政治神学的パラダイムがどのように三位性神学の展開と衝突するかを論証しようとする」、「神の単一支配に関する教義は三位性教義を前にして挫折せざるをえなかった。アウグストゥスの平和(pax augusta)の解釈はキリスト教終末論を前にして挫折せざるをえなかった」(32)、「『政治神学』のようなものはもはや、ユダヤ教や異教という土地においてしか存在することはできない」、「『政治神学』は神学的に言って不可能だということを論証しようとした」(33)

6. 政治神学3——ジジェク

(1) スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対——キリスト教の遺産と資本主義の超克』

0. 誰のためでもなく、何のためでもなく

・「ポストモダン時代とその「思想」とやらにみられるもっとも悲惨な状況のひとつは、宗教的な要素が様々な衣をまとって回帰していることである」

「原理主義」「〈ニューエイジ〉的精神主義から脱構築主義そのもの」(7)

(宗教回帰は、1960年代の世俗化論の予言がはずれたという点で、宗教学ではしばしば話題になるが、世俗主義変容としてのスピリチュアリティこそ、真性の宗教が戦うべき相手なのかもしれない。では、どうすのか。)

↓

・ラカン派マルクス主義者ジジェクの提案。

「戦略を逆転すること」「キリスト教とマルクス主義のあいだには直接的な系統関係があるのだ。そう、キリスト教とマルクス主義は新種の精神主義の襲撃に対して一致協力して戦うべきなのだ」、「聖パウロ」(8)、「聖パウロを離れてキリストは存在しない」(9)

(20世紀前半の宗教社会主義論の再評価・再生は可能か？)

イエスではなく、パウロ、これがポイントである。現代のパウロ政治神学への注目は、重要な研究テーマである。)

1. バルカンの亡霊を放棄する

・「ある種の多文化主義的梦想が悪夢に転じたもの」(11)

・「反転した人種差別」「置換された人種差別の論理」(13)

・「今日の「反省された」人種差別は、逆説的に他者の文化に対する直接的な尊敬を通じて現れうるものである」(15)

・「グローバル的反省化／媒体化はそれ自体の野蛮な直接性を生むというヘーゲルの教え」(17)

・「この直接性が表しているのは、グローバルな反省化に伴った〈他者性〉に対する純

粹かつ赤裸々な（「昇華されざる」）嫌悪感にはかならない」（18）

2. 資本の幽霊 3. 〈対象 a〉としてのコーク 4. 悲劇から嘲笑喜劇へ 5. 犠牲者たち、どこもかしこも 6. 空想的（現実界） 7. なぜ真理は怪物的なのか 8. 石とトカゲと人間について 9. 構造とその出来事 10. 十戒から人権へ

1 1. 寛容の原理

・「[例外が[普遍的な]規則に基礎を与える]」（164）

・「真に弁証法的な問題は、連鎖と例外が直接的に一致することである」、「例外的な形象の連鎖」（165）

（シュミット、アガンベン、ジジエク……。啓蒙的近代の「普遍—特殊」とは、別の概念構築の試み。その意味では、ポストモダン。キリスト教の普遍性とは？）

1 2. キリストによる束縛の解除

・「キリストが（彼に先行するブッダのように）」「社会階層の停止を強調するため」、「この新しいコミュニティは明らかに除け者たちの集団として、既存の「有機的な」グループとは正反対のものとして構成されている」、「異常な」除け者コミュニティ」「の系譜」（175）

・「集団形成の二つの例」「〈教会〉と〈軍隊〉」、「根本的なパラドクスは、経験的な制度に関していえば、二つのコミュニティはしばしば入れ替えられる、ということである」（176）

・「〈教会〉と、社会制度内の〈教会〉の権威を脅かす対抗-コミュニティとして台頭した修道院」、「〈教会〉のあったところに、〈軍隊〉が生じなければならない」（177）

・「均衡状態を回復するための円環の論理を停止すること」「社会のヒエラルキーは逆立ちしている」、「精神分析でいう倒錯への誘惑を避けること」「そんなことになれば」「単にその上下を入れ替えて逆立ちさせただけであり」「いぜんとしてそれに寄生することになる」、「愛は社会のヒエラルキーの偉大なる粉碎者ではないのか」（178）

（単なる逆立ちという解放運動の問題点。解放の神学、特にフェミニズムの落とし穴）

・「愛において、そして愛という動機から、愛する者を憎め」、「私は、かけがえのない人間として彼を愛するがゆえに、社会的-象徴的構造に取り込まれた彼の側面を「憎悪」するのである」（179）、「社会的役割」やイデオロギー的な機能や仮面の下に隠れている「現実の人間」をみるべきである、というありふれた「ヒューマニズム的な」思想とはいっさい関係ない「聖パウロは、断固たる「理論的反-ヒューマニズム」の持ち主である」、「だれをも人間的な見方によって知ることはすまい」（180）

（ここは肝心ではあるが、難しい。）

・「束縛の解除」は「象徴的な死」をともなっている」「法に対して死ぬ」（180）、「新たにゼロから出発する身振り」「束縛の解除」のなかには、おそろしい暴力が存在している」「徹底的な「過去の清算」という暴力」

（これはユダヤ教の起源にあるあの暴力とは違うのか。この暴力はトラウマにならないのか。）

・「真に信じる者は仮象を、ひとつの仮象を通じて輝き出す神秘的な次元を、信ずる」、「彼は他者のなかに、他者本人すら気づいていない〈善良さ〉を見出す。ここでは、仮象は現実にはもはや対立していない」（181）

・「〈絶対的なもの〉は脆弱ではかないものである」、「そうした奇跡的な、しかし同時にきわめて脆弱な瞬間において、われわれの現実にはまったく別種の次元が生ずるのである」（182）

（たしかに、絶対とは？）

・「理想化と崇高化との差異」「誤った崇拜は理想化をうむ。それは他者の弱さを見えな

くする」、「あるいは」「自己のいづく幻想を投影するスクリーンとして他者を利用し、他者そのものを見えなくする。一方、真の愛は、愛する者をありのままに受け入れる」、「愛とは活動のことである」(182)

(波多野とジジエクの近さ)

13. 「おまえはやらねばならない、できるのだから！」 14. 知識から真理へ・・・
そして再び知識へ 15. 脱出

(2) スラヴォイ・ジジエク『操り人形と小人——キリスト教の倒錯的な核』

0. 序——神学という名の操り人形

・「神学的な次元は、脱構築による、「世俗化以降の」メシア的転回という意匠のもとで息を吹き返している」、「ベンヤミン」『神学』と呼ばれた操り人形

・「宗教が、もはや特定の文化的・生活形態に完全に組み込まれたり、それと同一化したりするのではなく、自律性を獲得し、その結果、様々な文化にまたがる同じひとつの宗教として生き残ることができるような体制——これは、近代のありうべき定義のひとつである。宗教は、このように蒸留されることによって、みずからをグローバル化できるようになる」(8)

・「そうなるためには犠牲も必要」「宗教は、社会全体をまとめるという世俗的な機能の面においては、補助的な付随現象に格下げされる」「宗教が担う役割には二つある。治療的役割と批判的役割である」(9)

・『『信仰と知』「宗教の三様態」「民衆の宗教」「実定的な宗教」「〈理性〉の宗教」(10)

・「問題は、近代という〈理性〉の時代において、宗教は社会を有機的にまとめるというこの機能をもはや果たすことができない、ということである。今日、宗教がこの力を失い、もはやそれを取り戻すことができないのは、科学者や哲学者のせいだけではない。「普通の」人々という大きな集団のせいでもある」(11)

・「宗教的な問題に関して第一に銘記すべきことは、「深遠な精神性」への言及がふたたび流行していることである」(12)

・「キリスト教の転覆的な力を秘めた核は」「唯物論的アプローチによってしか理解できない」、「真の弁証法的唯物論者になるためには、キリスト教的な経験を経るべきなのだ」(13)

・「人々が率直に「本当に信じた」時代は、歴史上、存在しただろうか」、「主観的にみて完全に真実であると思うこと」「に対する率直な信仰は」(13)「近代的な現象である。前近代の社会は、率直に信じたのではなく、距離をとって信じていた」(14)

・「われわれは今日、もはや「本当の信仰心」をもっていない。われわれはただ、自分の属する共同体の「生活様式」に対する敬意の一環として(いくつかの)宗教的儀礼や慣習に従っている」、「わたしは実際にはそれを信じていない。それはわたしの文化の一部なのだ」、「われわれの時代の特徴である」(15)

「今日、われわれは結局、みずからの文化をそのままに生きていくひとたち、文化に対する距離を欠いたひとたちを、文化にとっての脅威を感じている」(15)

・「昨今の漠然とした精神主義」(16)、「キリスト教のグノーシス主義的異端と同質のもの」(17)

・「聖パウロの使徒書簡」「人間としてのイエス」「対して、まったく、おどろくほど無関心であることがわかる」、「イエスの死と復活という事実を確認したあと、パウロは、彼の本分であるレーニンの仕事、すなわち、キリスト教共同体と呼ばれる新しい党を組織

する仕事に向かう」、「レーニン主義者としてのパウロ」（18）

・「パウロは、ユダヤ的伝統の内部から読まれるべきである」「彼の切断が本来もっている急進性を、彼がユダヤ的伝統をいかに内部から掘り崩したかということをも」、「われわれは「生成過程にあるキリスト教」を捉えることができる」（19）

1 東洋が西洋に出会うとき

・「シェリングの問い」「〈神〉の人間化、永遠性からわれわれの現実というかりそめの世界への神の降下」は「〈神〉自身の視点からみれば上昇なのだとしたら？」「〈神〉が十全な現実化を得るための」（22）

・「真の愛とは、まさしく、約束された〈永遠性〉を不完全な個人のために捨てるという、それとは反対の動き」「愛のために永遠の存在を放棄する身振り」

・「永遠性が究極の牢獄、息の詰まるような閉域であり、時間への転落だけが人間の経験に〈開け〉を導入するのだとしたら」「「顕現」という〈出来事〉」（23）

・「〈神〉が〈神〉のものから捨て去られたことを告白するその叫びの瞬間」、「〈神〉が一瞬であれ無神論者に見える宗教」、「キリスト教は、おそろしいまでに革命的になる」「〈神〉が単に全能であるだけでは完全ではないと感じた宗教は、地上に宗教多しといえどもキリスト教においてほかない」（25）

2 正統の戦慄に満ちたロマンス

3 〈現実的なもの〉という逸脱

・「ジャック・ランシエール」「社会組織のなかに固定された場所をもたない、排除された者である彼らは、みずからを〈社会全体〉の、真の〈普遍性〉の代理人、代表として提示したのである」、「部分ならぬ部分」（98）、「政治とは本来、つねに、〈普遍〉と〈特殊〉とのある種の短絡を含んでいる。つまり、それは、「普遍的かつ単独的なもの」というパラドクス」、「非-部分と〈全体〉とのこの同一性」、「あらゆる偉大な民主主義的出来事のなかに認められる」（99）

・「キリスト教的な同一化のかたち」「それは、最終的には失敗との同一化なのである」「同一化の対象は〈神〉なのだから、ここでは、〈神〉自身が失敗することがしめされねばならない、と」、「われわれは、みずからの失敗において、まさに神の失敗と同一化する」（135）

・「このカーニヴァル的な転倒を、「わたしが弱いのは、〈神〉の力を見やすくするためである」といった言葉と同列に理解してはならない。この転倒がいつているのは、ばかにされ、笑いものにされたわたし、自分の弱さをさらし、嘲笑の的になったわたしは、同じくばかにされ、笑いものにされたキリスト——威厳や尊厳をすっかり奪われた、究極の聖なる〈愚か者〉キリスト——と同一化する、ということなのだ。パウロの考えでは、偽使徒たちは強者であり、自分たちのことをえないと考えている」、「このパウロの姿勢を、バフチンのような既存の権威のカーニヴァル的逆転と同一視することは、まちがいである。後者の考え方は、根本的に異教的である。階層的な権力関係は、〈モノの秩序〉の自然の均衡を壊しているゆえに脆弱である、したがって、権威は、おそかれはやかれ無に帰する——後者の依拠する明察は、これである」（137）

・「われわれが〈神〉と同一であるのは、あくまで、〈神〉が〈神〉自身と同一ではなく、自己とを放棄したとき、つまり、〈神〉とわれわれとを隔てる根源的な距離が、〈神〉そのものに「内在化」されたときである。〈神〉からの分離という根源的経験は、まさに〈神〉とわれわれをひとつにする要素なのだ。ただし、そういえるのは、われわれはおすした経験を通じてはじめて、〈神〉の根源的な〈他者性〉と正面から向き合うことになる、というありふれた神秘主義的な意味においてはではない。屈辱と苦痛は、唯一の超越論的な感情であるというカントの主張と同じ意味においてである。わたしは神の至福と同一化できるという考えは、ばかげている。わたしは、〈神〉からの分離という無限の痛みを経験してはじめて、〈神〉自身（〈磔〉になったキリスト）と経験を共有することができるのだ」（138）

4 法から愛へ……そしてまた法へ

・「〈残余〉とは、類そのものを具現している過剰な要素以外の何ものでもない」、「メシア的次元は」「ゆるぎない中立的な普遍性ではなく、それぞれの特異な要素がかかえこむ自己分裂である」、「ラクラウとランシエールが論じているように、本来の意味での民主主義の主体は、「残余」である」、「それ自身に固有の、特定の場所を占めることができないこうした主体は、普遍性そのものを具現している。根源的な政治的普遍性」「と、例外に基礎づけられた普遍性」「を対置したとき」「ポイントは、根源的普遍性を作動させる単一的な要因は、〈残余〉そのものである、しなわち、例外に基礎づけられた「公式の」普遍性のなかに固有の場所をもたないものである、ということだ」(164)、「排除されたものたち」、「パウロ的普遍性は、特異な内容を容れる空虚で中立的な容器としての沈黙した普遍性ではなく、「戦う普遍性」、特異の内容全体を貫通する根源的な分割というかたちとなって現れる普遍性である」(165)

5 差し引くこと——ユダヤ教的に、キリスト教的に

・「ヨブの苦難の（無）意味という問題」「人類史におけるイデオロギー批判の最初の例」、「なんらかの意味があるはずだという観念を一貫して拒否」、「キリストの苦難もまた無意味なのであって、有意味な交換の行為ではないのである」、「キリストの場合、苦難する絶望した人間（ヨブ）と〈神〉とを分かちギャップは、〈神〉自身の根源的な分裂として、あるいはむしろ自暴自棄の行為として、〈神〉自身のなかに置き換えられるのだ」(188)

・「全能の気まぐれなく神-父〉に対する不満ではなく、〈神〉の無力さを暗示する不満である」「父親の強さを信じていた子供が、父親には子供を助ける力がないということをおもに発見したときの状態に似ている」、「みずからの無力さをさらけ出しながら実際に死ぬのは、そしてその直後に〈聖霊〉のかたちをとって死からよみがえるのは、〈神-父〉なのである」(189)

・「沈黙の身振りをとるなかで、神の無力さに気づいた」、「〈神〉は正当でも不当でもない、ただ無力なのである。ヨブが突然理解したのは、ヨブの苦難において実際に試練を受けているのは彼ではなく、〈神〉自身であるということ、そして〈神〉がこの試練に無残にも負けた、ということである」

<参考文献>

1. Jon Simons (ed.), *From Agamben to Žižek. Contemporary Critical Theorists*, Edinburgh University Press, 2010.
2. Slavoj Žižek, *The Fragile Absolute --- or, why is the christian legacy worth fighting for?*, Verso, 2000. (スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対——キリスト教の遺産と資本主義の超克』中山徹訳、青土社、2001年。) , *The Puppet and the Dwarf. The Perverse Core of Christianity*, The MIT Press, 2003. (スラヴォイ・ジジェク『操り人形と小人——キリスト教の倒錯的な核』中山徹訳、青土社、2004年。)
3. スラヴォイ・ジジェク『ラカンはこう読め！』紀伊國屋書店、『ポストモダンの共産主義——はじめは悲劇として、二度めは喜劇として』ちくま新書。
4. Adam Kotsko, *ŽIŽEK and Theology*, T & T Clark, 2008.
5. 芦名定道「現代思想と〈神〉の問い——ティリッヒからジジェクまで」、『理想』2012. No. 688、40-52頁。